

# 浄土からの道

―二河白道の譬えに聞く―

大江憲成

# 浄土からの道

— 二河白道の譬えに聞く —

## 目次

- 5 本書について
- 8 二河白道の譬にがびやくどう書ひゆき下し
- 17 はじめに 譬ひゆ喩ゆとは何か
- 23 ① 「往生人おうじょうにん」とは誰のこと？
- 31 ② 今、私たちはどこに向かっているのか？
- 39 ③ 私の歩みをさえぎるものは？
- 47 ④ 私の歩むべき道は？
- 55 ⑤ 歩むべき道が見えない
- 63 ⑥ 誰と出会うのか
- 71 ⑦ 私を殺そうとする者
- 79 ⑧ 死おそを怖おそれて

166	159	資料編	151	143	135	127	119	111	103	95	87
親鸞聖人のご解釈 （『愚禿鈔』より）	善導大師のご解釈 （『観経疏』より）		おわりに お浄土は今に開かれて	⑬ 善 <small>よ</small> き師、善 <small>よ</small> き友に出遇つて	⑭ 感動は道の発見	⑮ 呼びかけの中に願われて	⑯ 阿 <small>あ</small> 弥 <small>み</small> 陀 <small>だ</small> さまの招喚 <small>しょうかん</small> （お招 <small>まね</small> き）	⑰ 釈迦・諸 <small>しよ</small> 仏 <small>ぶつ</small> の発遣 <small>はつけん</small> （お勸 <small>すす</small> め）	⑱ すでに道あり	⑲ 出口のない自力 <small>じりき</small> の心	⑳ 自己 <small>じこ</small> と出遇 <small>であ</small> つて

## 凡例

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

・「二河白道の譬喩」の書き下しは、『真宗聖典』二一九頁～二二〇頁（『教行信証』

「信巻」所収）によります。

## 本書について

本書は、「二河白道の譬喩（譬え）」といわれる譬喩が私たちに何を伝えようとしているのか、そのメッセージにふれていただくことを願ひ刊行したものです。

この譬喩は、中国のすぐれた仏教者であり、親鸞聖人が讃えられた七高僧の一人である善導大師（六一三―六八一年）という方がつくられたものです。善導大師は、『浄土三部経』、いわゆる『仏説無量寿経』（大経）、『仏説観無量寿経』（観経）、『仏説阿弥陀経』（小経）の三つの経典を大切にされましたが、とりわけ『観経』については、『観無量寿経疏』（観経疏）という註釈書を著し、重んじられています。その『観経』には、浄土に生まれ往くことを願う者は、必ず三つの心を起し、大切に保つていかなければならないと説かれています。その心とは「至誠心（まことの心）」、「深心（深く信ずる心）」、「回向発願心（浄土に生まれ往きたいと願う心）」の三つで、古来より三心と呼ばれています。

大師は『観経疏』の中でこの三心を解釈しておられますが、三つ目の心である「回向発願心」を解釈される箇所はこの「二河白道の譬喩」は出てきます。

親鸞聖人は、この善導大師がいたただかれたご解釈を大切な教えといたadaki、主著である『顕浄土真実教行証文類』(教行信証)に引用されています。生涯をかけて推敲し続けられた『教行信証』にこの譬喩が引用されていることを考えれば、親鸞聖人がこの譬喩をどれほど大切にされていたかをうかがい知ることができます。

では、その善導大師がつくられ、親鸞聖人が大切にされた「二河白道の譬喩」とは、どのような譬喩話で、私たちに何を伝えようとしているのか。また、親鸞聖人はこの譬喩をどのように受け止められていたのでしょうか――。

本書は、そのことを視座に、多くの方々に教えの言葉に親しんでいただきたいとの願いのもと、九州大谷短期大学名誉学長である大江憲成氏に

『同朋新聞』にて連載（三〇一六年九月号〜二〇一八年二月号）いただいたものに加筆いただき、書籍化したものです。

今回の書籍化にあたり、同朋の会等でも活用いただきやすいように、巻頭に「二河白道の譬喩」の全文を、また巻末に「資料編」を設け、「善導大師のご解釈（『観経疏』より）」、「親鸞聖人のご解釈（『愚禿鈔』より）」を掲載しました。

本書を繰り返しお読みいただき、「二河白道の譬喩」にふれ、譬喩が伝えんとするメッセージに一人でも多くの方が出遇であっていたことを願っております。

最後になりましたが、書籍化をご快諾いただきました大江憲成氏にあらためて厚く御礼申し上げます。

二〇一九年十月 東本願寺出版

二河白道の譬喩 書き下し

本文

(真宗聖典二一九〜二二〇頁)

また一切往生人等に白さく、  
今更さらに行者ぎようじやのために、一つ  
の譬喩ひゆを説きて信心を守護し  
て、もつて外邪げじや異見いけんの難なんを防  
がん。何者かこれや。譬たとえば、  
人ありて西に向かいて行かん  
と欲ほつするに百千の里ならん、  
忽然こつねんとして中路ちゆうろに二つの河あ

本書該当頁

■ 「また一切往生人等に  
何者かこれや。」 23頁

■ 「譬えば、人ありて、  
百千の里ならん、」 31頁

■ 「忽然として中路に、  
南北辺なし。」 39頁

り。一つにはこれ火の河、南  
にあり。二つにはこれ水の河、  
北にあり。二河おのおの闊さ  
百歩、おのおの深くして底な  
し、南北辺なし。正しく水火  
の中間に、一つの白道あり、  
闊さ四五寸許なるべし。この  
道、東の岸より西の岸に至る  
に、また長さ百歩、その水の  
波浪交わり過ぎて道を湿す、  
その火焰また来りて道を焼

■ 「正しく水火の中間に、  
また長さ百歩、」  
47頁

■ 「その水の波浪交わり、  
休息なけん。」  
55頁

く。水火あい交わりて常にし  
て休息くそくなけん。この人すでに  
空曠くうこうの廻はるかなる処ところに至るに、さ  
らに人物にんもつなし。多く群賊ぐんぞく悪獣あくじゅう  
ありて、この人の単独なるを  
見て、競きそい来りてこの人を殺  
さんと欲ほつす。死を怖おそれて直ただち  
に走りて西に向かうに、忽然こつねん  
としてこの大河たいがを見て、すな  
わち自ら念言ねんごんすらく、「この  
河、南北へんぱん辺畔を見ず、中間に

■ 「この人すでに」

さらに人物なし。」

63 頁

■ 「多く群賊悪獣ありて」

西に向かうに、

71 頁

■ 「死を畏れて直ちに」

自ら念言すらく、

79 頁

■ 「この河、南北」

死せんこと疑わず。」

87 頁

一つの白道ちやんどうを見る、きわめて  
これ狭少きやうしょうなり。二つの岸、あ  
い去ること近ちかしといえども、  
何なに由よつてか行くべき。今日きよう  
定さだんで死しせんこと疑ぎわず。正まさ  
しく到いたり回かえらんと欲ほつすれば、  
群賊ぐんぞく悪獸あくじゆう漸ぜん漸ぜんに來きたり逼せむ。正まさ  
しく南北なんぼくに避さり走しらんと欲ほつす  
れば、悪獸あくじゆう毒虫どくちゆう競きやうい來きりて我  
に向むかう。正まさしく西せいに向むかい  
て道みちを尋たずねて去ゆかんと欲ほつすれ

■ 「正しく到り回らん」  
墮せんことを。」  
95頁

ば、また恐らくはこの水火の二河に墮せんことを。」時に当たりて惶怖すること、また言うべからず。すなわち自ら思念すらく、「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん。すでにこの道あり。必ず度すべし」と。この念を

■ 「時に当たりて、必ず度すべし」と。」

103頁

■ 「この念を作す時、すなわち死せん」と。」

111頁

作<sup>な</sup>す時、東の岸にたちまちに  
人の勸<sup>すす</sup>むる声を聞く。「仁<sup>き</sup>者<sup>み</sup>  
ただ決定<sup>けつじよう</sup>してこの道を尋<sup>たず</sup>ねて  
行<sup>ゆ</sup>け、必ず死の難<sup>なん</sup>なけん。も  
し住<sup>とど</sup>まらばすなわち死せん」  
と。また西の岸の上に人あり  
て喚<sup>よほ</sup>うて言<sup>い</sup>わく、「汝<sup>なんじ</sup>一心<sup>いっしん</sup>に  
正<sup>しやう</sup>念<sup>ねん</sup>にして直<sup>ただ</sup>ちに來<sup>きた</sup>れ、我<sup>われ</sup>よ  
く汝<sup>なんじ</sup>を護<sup>まも</sup>らん。すべて水火<sup>すいふく</sup>の  
難<sup>なん</sup>に墮<sup>だ</sup>せんことを畏<sup>おそ</sup>れざれ」  
と。この人<sup>このひと</sup>すでに此<sup>こゝ</sup>に遣<sup>つか</sup>わし

■ 「また西の岸の上にく

畏れざれ」と。」

119  
頁

■ 「この人すでに」

退心を生ぜずして、

127  
頁

彼かしこに喚よほうを聞きて、すなわち  
自ら正まさしく心身に当たりて、  
決定けつじようして道を尋ねて直ちに進  
みて、疑ぎ怯こう退たい心を生ぜずし  
て、あるいは行くこと一分二  
分ぶんするに、東の岸の群賊等喚よほ  
うて言わく、「仁き者み回かえり来きたれ。  
この道嶮けん悪あくなり。過すぐること  
を得じ。必ず死せんこと疑わ  
ず。我等われらすべて悪心あつてあ  
い向むかうことなし」と。この人、

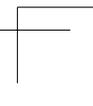
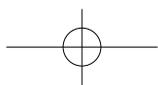
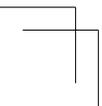
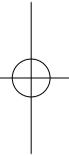
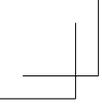
■ 「あるいは行くことと  
向うことなし」と。」  
135 頁

■ 「この人、喚う声をく  
これはこれ嶮なり。」  
143 頁

喚<sup>よほ</sup>う声を聞くといえどもまた  
回顧<sup>かえりみ</sup>ず。一心に直ちに進みて  
道を念じて行けば、須臾<sup>しゆゆ</sup>にす  
なわち西の岸に到<sup>いた</sup>りて永く諸<sup>しよ</sup>  
難<sup>なん</sup>を離<sup>はな</sup>る。善友<sup>ぜんぬ</sup>あい見て慶楽<sup>きやうらく</sup>  
すること已<sup>や</sup>むことなからんが  
ごとし。これはこれ喩<sup>たとえ</sup>なり。

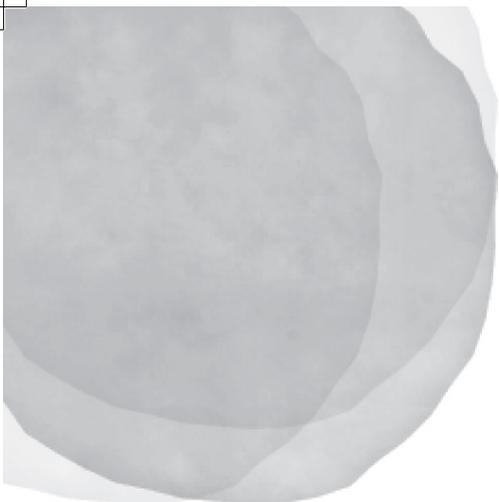
---

---



はじめに

譬<sup>ひ</sup>喩<sup>ゆ</sup>とは何か



その昔、ある学生の訴えうったに出会ったことがあります。九州大谷短期大学では毎週、学生の相談日が設けられていました。どの学科の学生でも相談したい教員を選んで相談に行くことのできる時間です。オフィスアワーといっています。彼は私の部屋に入ってくるなり、ぶつきらばうに突っ立ったままで語り始めました。私は彼をソファアに座るように勧めて、話を聞きました。だいが長く聞いていたのですが、要するに彼の訴えたかったことは次のようなことでした。

「つながらないのです」。

「消え入りそうなのです」。

「どうせ何も無いんでしょ」。

そして、しばらく話して彼は、「もう、どうでもいいんです」と言って立ち去って行こうとしました。

これは彼に限らず、私たちはみんな、この問題をずっと抱えて生きており、そして生きあぐねています。行き詰まりなのです。

就職が決まらなかったり、病気で入院してなかなか仕事に復帰できなかつたり、ここに身を置いていること自体がイヤでたまらなかつたり…です。

これらの行き詰まりは、人間に生まれた限り誰もが突き当たっていく壁です。

私たちはその壁の前で一人たたずみ、やたらとぶつかっては自暴自棄になり、最後にはこの大切な人生をあきらめて締めくくろうとします。「どうせ、こんなもんだ」と。ところが、その壁を、乗り越えるべき人生の大切な課題であると受け止め、乗り越えて生き切ることのできた方々がおられたのです。

その方々を「諸仏」と申します。人間の歴史に現れてくださった数々の仏さまです。お釈迦さまや親鸞聖人もそのお一人です。

彼らは、出会わざるを得ない人生の壁をつくづく経験され、それにつぶされずにさらに乗り越える道を見いだ

した方々です。「道の人」と呼ぶこともできるでしょう。さらに、道を見いだしたのではなく、道があることを周りに、あるいは後に生まれてくる人びとに伝えてくださったのです。

現在も、諸仏は「道ここにあり」と、今の私たちに道のありかを語りかけてやみません。

これからみなさんと尋ねていく「二河白道」にがびやくどうは、そのような諸仏からのメッセージなのです。

私たちは日ごろ世間せけんの考えにドツプリと浸ひかって生きています。自分自身で考えているように思っていますが、実は世間の考えで考えてしまって、行き詰まっているの

です。

一方、諸仏の語りかけてくださるメッセー<sup>ジ</sup>は、譬<sup>ひ</sup>喩<sup>ゆ</sup>という形式をとることによって、世間の考えよりも遙<sup>はる</sup>かに深く、私たちの本当の姿、生きるべき方向、出会うべき世界を教えてくださいと申せましょう。

これから、「二河白道」をいただいてまいります。その中で、私たちの歩むべき道が私たち一人ひとりのところで見いだされたならば、まことに有り難いことです。